資料紹介

幕末期佐賀藩の役料帳について
―史料翻刻『年役々料書出帳』『役料帳』―

中野正裕

史料六点の年代は安政～文久期であり、佐賀藩十代藩主鍋島直正の治世から嫡男直大の治世に交代する時期である。

史料六点の内、【史料1】から【史料3】までは朱点と貼紙はない。しかし【史料4】と【史料5】は石高と名前に朱点があり、貼紙が多数みられる。貼紙の年代は定かではないが、文久元年九月以降に書き記したのではないかと思われる。【史料6】は差出人と宛名には朱点はなく、冒頭に朱の角印が押されている。

一．はじめに

幕末期の佐賀藩士の役職についてみることができる『年役々料書出帳』と『役料帳』について紹介したい。

二種類の史料はともに鍋島家文庫（鍋島報效会所蔵　佐賀県立図書館寄託）のなかに六点伝来している。この六点の史料は形態が冊子である。状態はいずれも虫損が少なく、状態が良いことから翻刻に適していると考えた。なお六つの史料概要については、史料番号・記載年代・文書名・請求記号・丁数の一覧表を左に記した。

【幕末佐賀藩の役料書出帳と役料帳一覧】

史料	記載年代	文書名	請求記号	丁数
【1】	安政三年	年役々料書出帳（外様）	鍋339／1	一五
【2】	安政四年	役料帳（外様）	鍋339／2	一八
【3】	萬延元年	役料帳　御側	鍋339／3	一八
【4】	文久元年	役料帳　御側	鍋339／4	一八
【5】	文久元年	役料帳　外様	鍋339／5	二〇
【6】	文久元年	年役々料書出帳（外様）	鍋341／14	二一

二．記載内容

【史料1】（『安政三年年役々料書出帳』）には、役料・役職と担当者が記されている。安政三年（一八五六）十二月に藩の物成（年貢）から役料が渡されるように高木長左衛門・鍋島隼人・鍋島市佑の三人から御蔵方へ宛てて差し出されている。

外様（藩政機関・外役）トップである当役（請役家老）と年行司・御火術方の担当者の官途名が記されている。当役は安房が担当している。安房とは親類同格家の須古鍋島家の当主で直正庶兄にあたる茂真である。年行司は播磨が担当している。播磨とは家老家の太田鍋島家の当主で直正庶弟にあたる茂快である。

御火術方は十二年前の弘化元年（一八四四）に創設された役所で、嘉永七年（一八五四）から志摩が担当している。志摩とは家老家の倉町鍋島家の当主敬哉のことである。嘉永二年（一八四九）に敬哉の養子になるのが、直正末弟の守五郎文武である。

鍋島安房と鍋島播磨は、直正と一歳の年齢差がある。この時期は直正の兄弟が藩政を運営していることがわかる。

このほかに直正兄には川久保神代家（親類家）の鍋島賢在、餅木鍋島家（旗本）鍋島直孝、鹿島家（支藩）鍋島直永、直正弟には神代鍋島家（家老家）の鍋島茂元、鹿島家（支藩）鍋島直賢がいる。

【史料2】（『安政四年役料帳』）には、役所・役料・役職と担当者が記されている。安政四年（一八五七）九月に藩の物成（年貢）から役料が渡されるように三人から御蔵方へ宛てて差し出されている。

【史料1】のように請役所の当役は記されていない。しかし当役の次席になる相談役に池田半九郎・田中善右衛門・伊東次兵衛の名が記され、さらに附役・案文方書上方・別段御記録取立役・御仕組所書写役などが列記されている。各役所の担当者がより明確に記されていることがいえる。

相談役の担当者を同時期の鍋島家文庫『早引』（鍋３３１／２９）からみていくと、池田半九郎は物成二三〇石（内役米三〇石）、五十四歳、佐賀城下八幡小路、鍋島左馬助組に所属している。伊東次兵衛は一五〇石（内加米九五石・役米五石）五十二歳、半九郎と同じ八幡小路に居住し、鍋島周防組に所属している。

蘭学寮（嘉永四年設置）の記載もあり、教導役に緒方洪庵の入門者である渋谷良次と長崎でシーボルトに学んだといわれている大庭雪斎（景徳）が記されている。

また二五ヶ所ある番所詰の担当者が記されている。その中で轟木（鳥栖市）と神埼には上使屋敷が置かれ、三重津・今津（佐賀市）と伊万里楠久には船蔵番が置かれている。

【史料3】（『万延元年役料帳　御側』）は、御側の役所・役料・役職と担当者が記されている。万延元年（一八六〇）は差出人から鍋島市佑がはずれている。

御側（家政機関・内役）トップの御年寄は、鍋島市佑・鍋島隼人・高木長左衛門が担当している。御年寄の三人の家格は着座である。着座とは藩政に参与できる家格で親類四家・親類同格四家・家老六家の次に位置する。

幕末期に創設された海軍取調方の担当者は、濱野源六・池尻勘太夫・田中善兵衛・吉浦平太の四人と差次の古賀忠左衛門をあわせた五人が担当していることがよみとれる。

精錬方（嘉永五年設置、理化学研究所）には、南里与兵衛と佐野栄寿左衛門の二人が担当している。

器械御取入方の記載もある。この役所は『直正公御年譜地取』によれば、「器械取入方役局被相立ニ付」とあり、万延元年二月二九日に設けられた役所である。この役所は蒸気船の蒸気鑵修理用機械を購入するために置かれ、代価となる白蠟を取り扱っている。

佐賀藩の職制が記されている鍋島家文庫『明細録抜萃』（鍋３３２／６７）にはこの役所の記載がない。

【史料4】（『文久元年役料帳　御側』）【史料5】（『文久元年役料帳　外様』）は外様と御側の両方の職制をみることができる。この時期の佐賀藩職制を知ることが出来る貴重な史料といえる。

さらに【史料6】（『文久元年年役々料書出帳』）をみることで文久元年

（一八六一）の外様の職制は二つの史料から詳細にしることができる。

【史料4】の差出人をみると、高木長左衛門と鍋島市佑がはずされ、丹羽久左衛門が加わり、鍋島隼人と共に御蔵方へ差し出している。【史料5】は差出人の具体的な名前は記されず、御年寄中から御蔵方へ役料を与えるように差し出している。【史料6】は十二月に同様に差し出している。

担当者の変遷をみていくと、外様は【史料2】と【史料5】をみくらべると請役所相談役の池田半九郎が辞職、または死去と考えられる貼紙があり、さらに原田大右衛門が加筆されていることから、文久元年以降に原田が就任していることがよみとれる。おそらく文久元年以降に三人から一時的に四人となり、三人へと人員の変遷があったのではないかと思われる。なお『明細録抜萃』によれば請役所相談役は、着座役で人員は三人、役料は三十八石ヅツ与えられていたことが記されており十石の差がある。

一方の御側は【史料3】と【史料4】をみると、高木長左衛門の後任に丹羽久左衛門が就任していることがよみとれる。

池田と原田、高木と丹羽は侍から着座へ家格が上がり、これらの役職に就任していると思われる。

次に役所と役職の変遷をみていくと、安政四年に記されていた蘭学寮の記載はなく、大庭雪斎はこのとき好生館（安政五年設置、前身は医学館）教導方頭取に就任している。また、精錬方の記載もなく、佐野栄寿左衛門は濱野源六の後任として海軍取調方に異動し、濱野源六は御側の長崎御仕組役御備立役へ異動している。

【史料5】からは、文久元年の当役と御火術方の担当者はわからない。しかし【史料6】をみると、安房の後任に上総と記されている。上総とは武雄鍋島家の当主鍋島茂昌のことである。茂昌の父は、茂義で直正の姉寵姫と婚姻している。茂義の妹祐姫は鍋島敬哉、永姫は鍋島茂快、茂昌の妹藤姫は鍋島茂元に嫁いでいる。茂昌の母は島家の娘であり、茂昌と島義勇は姻戚関係にある。

【史料6】には【史料1】に記載されていた年行司が記されていない。御火術方の担当者は【史料1】と同じ倉町鍋島家の当主敬哉が記されている。

若殿様御附と恒姫様御附について

【史料3】と【史料4】から殿様附と若殿様附と姫様附の役人（御側頭・御側御目付・御小性頭・御醫師）が設けられていることがわかる。

『直正公御年譜地取』から文久元年の記事をみると、中将様を大殿様（直正）、御前様を大御前様（筆姫）、若殿様を殿様（直大）と称する伺いが出されている。同年十二月七日に両殿様の改名が済み「大殿様御名閑叟様（直正）」、「殿様御名肥前守様（直大）」となっている。このことから【史料5】は、いまだ殿様・若殿様の記載があるので、九月十八日から十二月七日以前の時期の役職が記されていることがわかる。

◇若殿様

若殿様とは、十代藩主直正嫡男淳一郎（直大）のことである。直大は文久元年三月十三日に侍従兼信濃守を叙任し、十一月に家督を相続し、十二月肥前守に叙任する。明治元年松平姓から本氏鍋島に復す。大正十年六月十八日に永田町の私邸で亡くなる。

◇恒姫様

恒姫様とは、直正女で直大妹宏姫のことである。宏姫の諱は靖子といい、嘉永四年二月十七日生まれ、慶応三年十一月十五日に熊本藩主細川護

久に嫁いでいる。大正八年十二月三十一日、六十九歳で亡くなる。

三．まとめに

最後に関連する史料について紹介したい。鍋島家文庫『御親類御家老諸役』（鍋３３２／５９）は、享保八年の四代藩主鍋島吉茂から文久三年の一代藩主直大までの諸役の担当者の変遷が記されている史料がある。

『御親類御家老諸役』の冒頭をみると、佐賀藩領内の郡代（「小城郡加賀守」など）、請役は美作（多久家）、年行司は藤九郎、御勝手方は弥平左衛門（神代鍋島家）、御武具方は市正（倉町鍋島家）、馬究は隼人（伊万里鍋島家）といった役所の担当者が記されている。

安政三年の記載をみると、勘定所は親類家の河内（白石・直暠）、請役・御仕組所・郡方頭人は安房（須古・茂真）、年行司・宗門方・馬究は播磨（太田・茂快）、御火術方頭人は志摩（倉町・敬哉）と記されており【史料１】と記載が類似する。

ただし【史料１】には、勘定所の記載はなく兼帯までは記されていないことがよみとれる。

次に文久元年九月の記載をみると、勘定所は河内（白石・直暠）、請役・御仕組所・郡方頭人は上総（武雄・茂昌）、年行司・宗門方・馬究は周防（坊所・茂郷）、御火術方頭人は志摩（倉町・敬哉）と記されている。【史料６】をみると、当役に上総、御火術方に志摩が記されているが、勘定所の河内、年行司・宗門方・馬究の周防も記されていない。周防の記載がないのは、文久元年五月に江戸御屋敷都合頭人に就任しており、周防が出府していたためということがわかる。八月二十六日に周防が担当していた役所の担当者は、鍋島志摩が差次として就任している。

凡例

一．文字は原本に従った。ただし喜・嘉・森の異体字は常用になおした。
一．官途名などには（　）で家名・実名などを傍註で付した。
一．漢字の繰り返しは々とした。
一．合字のよりはひらがなで表した。
一．原本に記されている朱点は省略した。
一．貼紙は「　　」で表した。
一．抹消は左に〻を付けた。

参考文献

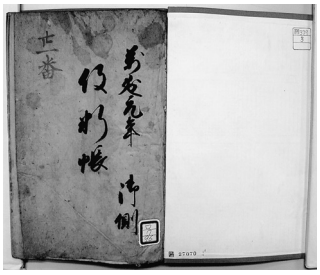
佐賀県史編さん委員会『佐賀県史　中巻（近世篇）』一九六八年
佐賀市史編さん委員会『佐賀市史　第二巻』一九八三年
藤野保編『続佐賀藩の総合研究』吉川弘文館　一九八六年
木原溥幸『幕末期佐賀藩の藩政史研究』九州大学出版会　一九九七年
中野禮四郎『鍋島直正公傳』侯爵鍋島家編纂所　一九二一年
『佐賀県近世史料』第一編十一巻・五編一巻・八編一巻　佐賀県立図書館
拙稿「幕末佐賀藩の職制について」『佐賀県立佐賀城本丸歴史館研究紀要第四号』二〇〇九年
生馬寛信・中野正裕「安政年間の佐賀藩士」『佐賀大学文化教育学部第14集1号』二〇〇九年など

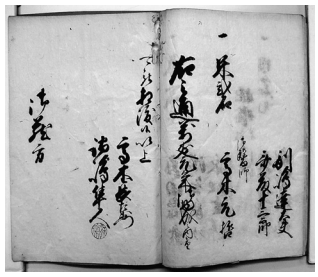
付記

本稿を作成するにあたり、史料の閲覧、掲載許可を下され格別の便宜をはかってくださいました財団法人鍋島報效会、ならびにその他多数の方々からご教示いただきました。心よりお礼申し上げます。

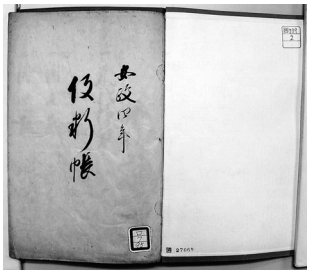
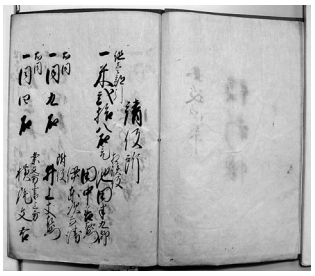
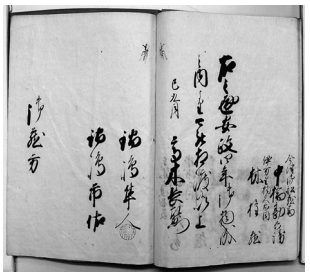
（佐賀県立図書館近世資料編さん室）

『年役々料書出帳』・『役料帳』（鍋島報效会所蔵　佐賀県立図書館寄託）

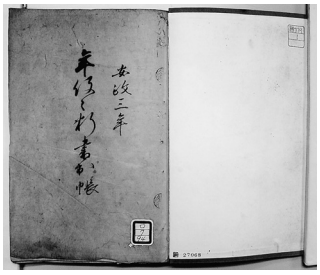
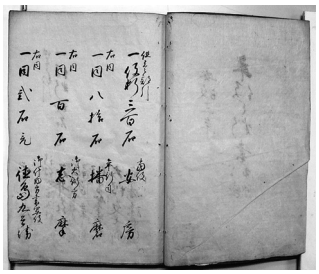
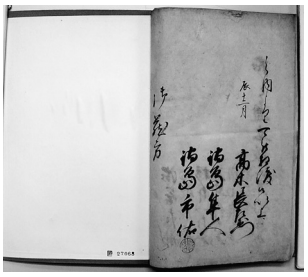




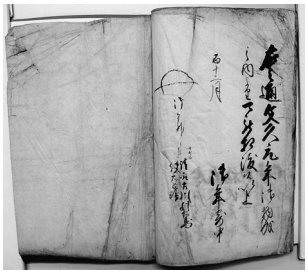
【史料３】（表紙・冒頭・末尾）

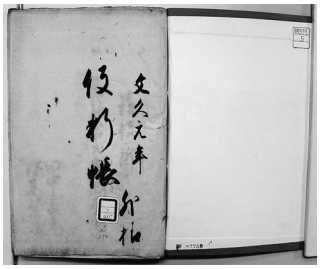
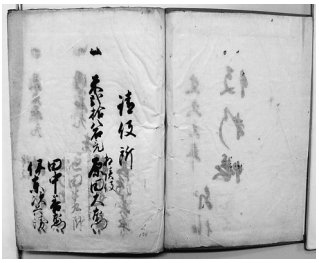
【史料２】（表紙・冒頭・末尾）

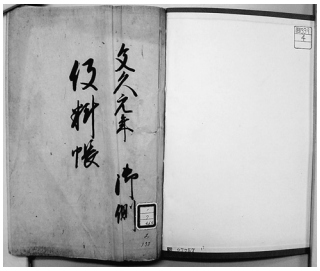
【史料１】（表紙・冒頭・末尾）



【史料６】（表紙・冒頭・末尾）

【史料５】（表紙・冒頭・末尾）



【史料４】（表紙・冒頭・末尾）

【史料1】

（表紙）

『　安政三年

年役々料書出帳』

但壱部引
一役料三百石　當役　安房（須古・鍋島茂真）
右同
一同八拾石　年行司　播磨（太田・鍋島茂快）
右同
一同百石　御火術方　志摩（倉町・鍋島敬哉）
右同
一同弐石充　御什物方書写役　徳島九兵衛
但壱部引
一役料弐石充　請役所書写役　石井喜左衛門
右同
一同三石　郡方附助役　藤瀬孫太郎
右同
一同五石充　学館都検　石丸十作
指南役　村上孫兵衛
北島兵右衛門
大塚朝次郎
横尾龍左衛門
満岡一兵衛
犬塚義一郎
中橋弾之允
迎文橘
下村忠太夫
東嶋末次郎
但壱部引
一役料七石
右同
一同五石充
右同
一同三石充
水町恕助
大家佐兵衛
中島源一郎
城島大之進
枚町權兵衛
蒲原嘉右衛門
中嶋六郎太夫
柴田良助
大隈久左衛門
郡方附助役より抱夫方兼帯
牟田口代之助
有田傳藏
石田助太夫
深江俊助
香田新左衛門
吉田四郎左衛門
年行司宗門方
馬兗方附役頭取
北原有右衛門
右同附役
星野惣右衛門
中嶋弥太夫
御火術方助役
伊東兵左衛門
千布右喜太
綾部大右衛門
高岸兵次
原三太夫
田中大之進
但壱部引
一役料三石三斗三升三合三勺充
右同差次
塚原左平太
宮部良太夫
諸岡杢兵衛
岡山瀧馬
米倉重兵衛
重松基右衛門
小代七四郎
宮部善之進
伊香賀寿右衛門
大塚文七郎
藤崎孫之進
成冨十郎助
犬塚忠右衛門
井手剛右衛門
石井八左衛門
西牟田秀吉郎
三谷千左衛門
江口小右衛門
手貝進之允

但壱部引
一役料五石充

寺社方町方附役
廣木作太夫
渡邊惣右衛門
生野源蔵

右同
一同七石充

盗賊改方抜荷改方
成松新兵衛
深江助右衛門

右同
一同五石充

究役
石井清左衛門
藤本桓作

右同
一同三石三斗三升三合三勺充

右同差次
重松清次
加賀權作
執行主一
石井又左衛門
相良寛蔵

右同
一同五石充

三御丸御番
諸岡伴之進
小川市左衛門
石井儀左衛門
綾部一郎左衛門
宮崎杢兵衛
副島五郎太夫
山崎孫三郎
副島達太夫

但壱部引
一役料三石充

御新地方助役
三浦丹右衛門

右同
一同三石充

迎栄之允
弥永茂右衛門
上野源左衛門

皿山代官助役
角五左衛門

市武代官助役
早田十助
大渡喜三太
古賀源四郎

上佐嘉代官助役
安住半作
八田弥右衛門
中山傳太郎

川副代官助役
丹羽五郎助
石井清八
中島善九郎

横辺田代官助役
藤井源助
庄島清五左衛門
古賀太右衛門
古賀太蔵
副島左源太
於保弥兵衛

但壱部引
一役料弐石充

銀蔵役
石井平之允
古川倉之助

右同
一同弐石五斗

右同
一同弐石

右同
一同壱石五斗充

但壱部引
一役料壱石五斗充

米蔵役
田代七郎右衛門
小芦藤之允

徒罪方
向井新八

取立方
伊東辰之助

諸御蔵心遣
福田兵太夫
中村勘之允
川副忠之允
太田辰之助
高木利兵衛
田中三左衛門
古瀬十之允
蒲原傳右衛門
千布文左衛門
上野平吾

諸御蔵番
石井善太夫
田代小左衛門
秀島外右衛門
東島忠兵衛
深町左兵衛
渡邊兵左衛門
嶋内丈左衛門
上野藤七
中西七三

右同
一同壱石五斗
右同
一同弐石充

深堀作右衛門
諫早御蔵番
牛島新五左衛門
御門御式臺番
牟田瑳助
大木平吾
陣内恕助
安岡易助
坂部久平
芦原鉄之助
三浦清兵衛
平本兵之進
相原丈之進
中嶋辰之助
庄島治兵衛
馬渡千三郎
田中荘兵衛
藤山兵蔵
白濱代四郎
綾部新五郎
堤與十
伊東助作
古川三太左衛門
上野助十
大庭助蔵
一番ヶ瀬勘助

但壱部引
一役料三石充

村岡五郎三郎
前山十作
大坪助九郎
二御丸御門番
成冨橘之允
福島佐一郎
辻儀兵衛
宮原太左衛門
秀島新左衛門
岩村大三郎
大塚七三郎
馬渡喜左衛門
増田七郎右衛門
野口愛右衛門
両御山方助役
安住清右衛門
野田善次
山本助之允
高楊市兵衛
田中十三郎
冨石忠七
石田武平
大坪龍太夫
相浦惣左衛門
香月三十
相良平作

右同
一同壱石五斗充

組扱
倉永五右衛門
堤善兵衛
北嶋五郎太夫
松本三郎兵衛
島内五郎右衛門
兵動忠太夫
宮冨忠一郎
市川新之允
原伊兵衛
市川五郎
北島龍右衛門
秀島嘉右衛門
渋谷左助
福地辰助
杁本一左衛門
石井作左衛門
内田官左衛門

右之通、安政三年御物成之内より可被相渡候、以上

辰十二月

高木長左衛門
鍋島隼人
鍋島市佑㊞

御蔵方

【史料2】

（表紙）『安政四年役料帳』

請役所

但壱部引
一米弐拾八石宛　池田半九郎
相談役
田中善右衛門
伊東次兵衛
右同
一同九石　井上丈左衛門
附役
右同
一同四石　横尾文吾
案文方書上方
但壱部引
一米三石　吉冨儀左衛門
別段御記録取立役
右同
一同四石充　野田文次郎
御仕組所書写役
宮嶋寿平
白濱関左衛門
山崎余五郎

長崎御仕組方
御番方

右同
一同九石　牟田口兵之丞
附役頭取
右同
一同七石充　山本傳左衛門
附役
田中五郎左衛門
本告治部右衛門
久保六郎助
百武作右衛門
牟田口利左衛門
関判蔵
中野兵右衛門
綾部四郎大夫

右同
一同四石六斗六升六合六勺充　諸岡伴之進
差次
枝吉三郎左衛門
牟田久左衛門
中橋頼蔵

大御目付

但壱部引
一米三拾石充　大木主計
村山尉右衛門

御目付

右同
一同拾石充　成松新兵衛
相良源兵衛
南部大七
濱野源六
辻小左衛門
井内左馬之允
張玄一
関千左衛門
渡邊右馬允
石橋三右衛門

郡方

但壱部引
一米八石充　納冨六郎左衛門
附役
原五郎左衛門

右同
一同五石三斗三升六合三勺　伊東嘉兵衛
差次
右同
一同五石充　大木傳之進
抱夫方
但壱部引
一米弐石五斗

御武具方

右同
一同弐拾石　多久伊織
相談役
右同
一同五石充　空閑九郎大夫
附役
片岡四郎兵衛
渡邊善左衛門
當分

御小物成所

右同
一同四石　浦忠左衛門
附役
右同
一同弐石六斗六升六合六勺　坂井次郎兵衛
差次

弘道館

但壱部引
一米拾石　古賀大一郎
教授役
右同
一同八石　草場磋助
助教役

右同
一同七石充

学館御目付
牟田口節左衛門
橋野新助

教諭
福嶋文藏
武冨文之助

右同
一同四石六斗六升六合六勺充

差次
渡邊善兵衛
大園寿兵衛

武術師範方

但壱部引
一米三石充

廣田長左衛門
戸田孫兵衛
嶋内形左衛門
野田佐五右衛門
圓城寺權助
山口清左衛門
諸岡大之助
藤山治兵衛
白濱次郎左衛門
吉村市郎右衛門

御境目方

右同
一同三石充

野田又七
福田大助

御火術方

但壱部引
一米五石充

附役
川瀬孫之允
増田安兵衛
空閑右兵衛
宮田新五左衛門
池尻勘太夫
石田善太夫
秀嶋大七
田代孫三郎

右同
一同三石三斗三升三合三勺充

差次
千布右喜太
綾部大右衛門

蘭學寮

右同
一同五石充

教導役
渋谷良次
大庭雪斎

勘定所

但壱部引
一米五石

附役
龜川新左衛門

右同
一同三石充

書抜役
島定左衛門
副嶋善九

御藏方

右同
一同弐拾石充

頭人
中村彦之允
松永五左衛門

右同
一同六石充

附役銀方請持
石井兵蔵
成冨林左衛門
中嶋文作

附役
馬渡禮太夫
中村大助
柴田和左衛門
清水新右衛門
松尾龍蔵

御石火矢方

但壱部引
一米拾石充

右同
一同弐石五斗充

御舩奉行

右同
一同拾石

御絵圖方

但壱部引
一米三石充

右同
一同弐石充

頭人
原次郎兵衛
百武善右衛門

附役
徳久弥太夫
関藤太夫
横尾善太夫

石隈徳太夫

沢野文作
成冨權作

差次
生嶋龍一郎
宮地平太夫
吉岡作左衛門

成冨久兵衛
一順差次 横尾英次

御印藏
右同 一同六石
古川利右衛門

御舩方
但壱部引 一米三石
古賀儀助

諸整方
右同 一同三石
藤崎五左衛門

修理方役
右同 一同弐石五斗
竹下文吉郎

一同壱石六斗六升六合六勺充
右同 差次 松永文平
宇野忠右衛門

検者方
右同 一同五石充
満岡長右衛門
横尾神左衛門

郷普請方
一順 松岡傳藏
但壱部引 一米弐石五斗充
小森覚右衛門
今泉弥太夫

右同 一同壱石六斗六升六合六勺充
一順差次 石井喜右衛門
八戸彦兵衛

献米方其外
右同 一同三石
松本文藏

諸番所詰
右同 一同弐石
一順差次 丹羽與左衛門

但壱部引 一米弐石充
千栗 山本達助
豆津 赤司三郎左衛門
市場 田中九左衛門
石塚 小林傳平
早津江 斐善太夫
佐嘉江 石井六郎兵衛
今津 今泉傳兵衛
柳鶴 辻寛一郎
深通 山村忠左衛門
深浦 高岸平兵衛

有田新村 石井五郎太夫
原明 久保良作
楠久 副島新右衛門
伊万里 石丸六兵衛
池峠 米倉清右衛門
桃川 太田惣太夫
椎場 石井傳右衛門
轟木上使屋敷 副嶋彦之允
神崎右同 深川藤蔵
中古賀御薬蔵番 萩原和喜太
餅田右同 松田權太夫
袋右同 福井甚兵衛
三重津御舩蔵番 徳久半之允
今津御舩蔵番 中橋勘兵衛
伊万里楠久右同 林權蔵

右之通、安政四年御物成之内より可被相渡

候、以上

巳九月　　高木長左衛門
　　鍋嶋隼人㊞
　　鍋嶋市佑

御蔵方

【史料3】

（表紙）
『萬延元年御側
役料帳
（朱書）
廿一番』

御年寄
一米四拾石充　（納富・保脩、後夏雲）鍋嶋市佑
　　（伊万里・直房）鍋嶋隼人
　　高木長左衛門

御側頭
一米拾弐石充　原田小四郎
　　井上丈左衛門
　　石隈徳太夫
　　徳永傳之助

御側御目付
一同拾石　本嶋藤太夫

御進物役
一同九石充　倉町左傳次
　　増田忠八郎

御進物方御記録役
一米四石　山崎左忠太

御小姓頭
一同七石充　古川與一

御駕籠心遣
一同七石充　倉永仁太夫
　　諸熊義左衛門
　　高木勘兵衛
　　星野惣右衛門

一米四石六斗六升六合六勺　差次　満岡權太夫

御備立役
一同弐拾石　丹羽久左衛門

御側長崎御仕組役
御備立役
一同七石充　横尾次郎右衛門
　　久保六郎助
　　牟田二右衛門

一米四石六斗六升六合六勺　差次　石井小介

海軍取調方
一同五石充　濱野源六
　　池尻勘太夫
　　田中善兵衛
　　吉浦平太

一同三石三斗三升三合三勺　横山平兵衛
　　千住大之助

御什物役
御道具役
一米五石充
差次
古賀忠左衛門
百嶋嘉右衛門
南里傳作
枝吉杢助

御什物役
相良宗左衛門
真崎五郎七

御馬方
一同四石
石井太左衛門

御鉄炮方
御狩方
一米四石
永渕嘉兵衛

御右筆
一同三石五斗充
坂田平之允
久冨三太夫
坂井清左衛門
田尻善五左衛門
中嶋善九郎

御懸硯方
一同五石
役内御目付
執行兵次
成冨林左衛門
一同五石充
片岡利左衛門
真崎權左衛門

帳究役
一米四石
坂本六兵衛
一同弐石六斗六升六合六勺
差次
岩瀬嘉右衛門

御小姓
一同五石充
片山傳七
秀嶋廣司
六角喜左衛門
堤辰十郎
野田祭四郎
早田十助
田代兵助
本嶋喜八郎
大庭助蔵

詰番外御小姓
一米四石充
野邊田剛四郎
中川貫之允
石井小源太
高楊市兵衛
馬渡七太夫
横尾勘介
成冨弥兵衛
田中大之進
伊東辰之助

両御山方
一米五石
一同五石充

元〆方
一同六石充

御絵圖役
一米三石
池田平太夫
石井小三次
差次
志波太兵衛
一同弐石充
田原源左衛門
副嶋十郎助
江口市郎右衛門
永田太右衛門
坂井助之丞
副嶋八右衛門
太田相介
村嶋喜兵衛
平尾吉左衛門
江副甚右衛門
伊東八郎
石井藤五左衛門
林清左衛門

役内御目付
吉岡大助
下村三郎左衛門
小野文左衛門
中山二兵衛
松村一兵衛

器械御取入方
一米四石充

精練(煉)方
一同三石充　服部善左衛門　一同三石充　御廣式番　河内軍右衛門
南里與兵衛　石井彦蔵
佐野栄寿左衛門　福岡清兵衛
大隈久左衛門
水ヶ江御茶屋番
一米壱石五斗　小森大七　一米弐石充　御醫師　池田玄瑞
高木元仲
欄干御茶屋番
一同弐石　田中三左衛門　池田栄庵
西牟田玄才
神野御茶屋番
一同壱石五斗　堤寶左衛門　聖堂　一同弐石充　御書物役　川崎寛蔵
古賀精蔵
御醫師
一同三石充　林梅馥
牧春堂
野口文郁
大石良英
嶋田南嶺
松尾栄仙
但半ヶ年勤二付半渡
一同弐石充　虫干役　宮冨浅之允
永田十郎助
(後鍋島直大)若殿様御附
御茶道頭
一米四石充　村嶋雪川　一米八石　御側御目付　香田新蔵
伊東春洋
一同五石充　頭取　張玄一
薮内元佐
八並次郎助
御廣式
山口栄四郎
石井官兵衛
一同四石充
一同九石　心遣　陣内幸右衛門　原田左平次
川原善左衛門
犬塚文十郎
中山平四郎
田中喜十郎
堤平次郎
古川新介
深川龍之助
石隈小太郎
御醫師
相良柳庵
宮田魯斎
渋谷良次
永松玄洋
一米三石充
(鍋島直正女宏)恒姫様御附
一同三石充　秀嶋儀左衛門
成冨權作
副嶋達太夫
斎藤十三郎
御醫師
一米弐石　高木元哲
右之通、萬延元年御物成之内より可被相渡候、以上
高木長左衛門
鍋嶋隼人㊞
御蔵方

【史料4】

（表紙）
『文久元年　御側
役料帳』

御年寄
一米四拾石充　鍋嶋市佑
鍋嶋隼人
丹羽久左衛門

御側頭
一米拾弐石充　原田小四郎
井上丈左衛門
石隈徳太夫
徳永傳之助
横尾次郎右衛門

御側御目附
一同拾石　本嶋藤太夫

御進物役
一同九石充　倉町左傳次
増田忠八郎

御進物方御記録役
一米四石　山崎左忠太

御小性頭
一同七石充　古川與一
横山平兵衛
千住大之助

御駕籠心遣
一同七石充　倉永仁太夫
諸熊義左衛門
高木勘兵衛
星野惣右衛門

一同四石六斗六升六合六勺　差次　満岡權太夫

御側長崎御仕組役
御備立役
一米七石充　久保六郎助
濱野源六
牟田二右衛門
石井小介

一同四石六斗六升六合六勺　差次　古賀忠左衛門

海軍取調方
一同五石充　池尻勘太夫
佐野栄寿左衛門
田中善兵衛
吉浦平太

御什物役
御道具役
一米五石充　百嶋嘉右衛門
南里傳作
枝吉木工助

御什物役
相良宗左衛門
真崎五郎七

一同三石三斗三升三合三勺　御什物役　御道具役差次　福田大介

御馬方
一同四石　石井太左衛門

一同弐石六斗六升六合六勺　差次　秀嶋外右衛門

御鉄炮方
御狩方
一米四石　永渕嘉兵衛

御右筆案文役
一同四石　大石又蔵

御右筆
一同三石五斗充　坂田平之允
石橋嘉源太
久冨三太夫
冨岡十蔵
坂井清左衛門
田尻善五左衛門
中嶋善九郎
山田神吾
平方猪兵衛

御懸硯方

一米五石「　」　役内御目付　執行兵次
一同五石充　成冨林左衛門
南里与兵衛
片岡利左衛門

帳究役

一同四石　坂本六兵衛
一同弐石六斗六升六合六勺　差次　岩瀬嘉右衛門

両御山方

御小性

一米五石充　片山傳七
秀嶋廣司
六角喜左衛門
野田祭四郎
早田十助
田代兵介
本嶋喜八郎
大庭助蔵
中野助太郎
廣渡達之進
光村寛六
嶋内栄之助

詰番外御小性

一同四石充　野邊田剛四郎
石井小源太

一同五石
一同五石充

元〆方

一米六石充　高楊市兵衛
横尾勘介
成冨弥兵衛
伊東辰之助
田中大之進
名尾定馬
河内覚助
陣内十蔵

役内御目附　吉岡大助
廣木作太夫
安住清右衛門
中山二兵衛
松村一兵衛
小野文左衛門
松永文平

御絵圖方

一同三石充　池田平太夫
石井小三次
差次　志波太兵衛
田原源左衛門
副嶋十郎助
江口市郎右衛門

一同弐石充　永田太右衛門
坂井助之丞
副嶋八右衛門
太田相助
「村嶋喜兵衛
平尾吉左衛門
江副甚右衛門」
伊東八郎
石井藤五左衛門
高取次郎太郎
斎藤用之助
大木傳
光安半作
大城外右衛門

器械御取入方

一同米四石充　林清左衛門
服部善左衛門

欄干御茶屋番

一同弐石　田中三左衛門
神野御茶屋番

一米壱石五斗　堤宝左衛門

御醫師

一同三石充　林梅馥
牧春堂
野口文郁

一同弐石充　大石良英
松尾栄仙
差次　松隈元南
城嶋淡堂

御側詰醫
一米弐石充　朝日楊庵
大中春良
三田道筑
嶋田東洋
田原文哉

御茶道頭
一同四石充　村嶋雪川
伊東春洋
楠田知才

御廣式
一同九石　心遣　陣内幸右衛門
一米三石充　御廣式番　河内軍右衛門
石井彦蔵
福岡清兵衛
大隈久兵衛

御醫師
一同弐石充　高木元仲
池田栄庵
西牟田玄才

聖堂
一同弐石充　聖堂番　実重松五郎
御書物役　古賀精蔵
相原丈之進

虫干役
但半ヶ年勤二付半渡
一同弐石充　宮富浅之允
永田十郎助

（後鍋島直大）若殿様御附
一米拾壱石　御側頭　成富作兵衛
一同九石　御側御目附　香田新蔵
一同六石充　御小性頭　張玄一
山口栄四郎
差次　石井官兵衛
一同四石　御小性　原田左平次
一同四石五斗充　川原善左衛門
犬塚文十郎
中山平四郎
田中喜十郎
堤平次郎
古川新「介」

深川龍之助
石隈小太郎
堤辰十郎
元〆方　井上善兵衛
一米五石　御醫師　高木玄堂
一同弐石五斗充　高田魯斎
相良柳庵
渋谷良次

（直正女左）恒姫様御附
一同三石宛　秀嶋儀左衛門
成富利左衛門
副嶋一左衛門
斎藤十三郎

御醫師
一米弐石充　高木玄哲
上村春庵

右之通、文久元年御物成之内より可被相渡候、以上
酉九月　丹羽久左衛門
鍋嶋隼人

九月十八日
御蔵方　使勝平
受取古川利左衛門

【史料5】

（表紙）
『文久元年　外様
役料帳』

請役所

一米弐拾八石充　相談役　原田大右衛門
「　」
田中善右衛門
伊東次兵衛
一米九石充　附役　深江助右衛門
平田助太夫
一同四石充　案文方書上方「　」
宮嶋寿平
「愛野忠四郎」
一同四石　「御記録方」満岡一兵衛」
一同三石　「　」　案文方別段記録取立役　野口栄次郎
御仕組所書写役　今泉傳兵衛
一米四石充　枚町權兵衛

長崎御仕組方
御番方

一同弐拾石　相談役　中野数馬
一同七石充　附役　田中五郎左衛門
山本傳左衛門
枝吉三郎左衛門
本告治部右衛門
「　」
牟田久左衛門
一米四石六斗六升六合六勺充　右同差次　松永外右衛門
洪助之進
鐘ヶ江次郎兵衛
嘉村治兵衛

大御目付

一同三拾石宛　納冨又次郎
村山尉右衛門

御目付

一同拾石充　「諸岡彦右衛門
枚本兵力　」
北原有右衛門
石橋三右衛門
「野田清右衛門
石井六郎左衛門
辻小左衛門

郡方

一同九石　米
一同八石充　重松清次
関千左衛門」
渡邊「善太夫」
中嶋弥大夫
執行主一
橋野新助
附役頭取　生野孫右衛門
附役　羽室雷助
沢野源左衛門
「藤本桓作
原五郎左衛門
百武作右衛門
柴田和左衛門」
一米五石三斗三升三合三勺　差次　津田三郎左衛門

御武具方

一同弐拾石　相談役　坂部又右衛門
一同五石充　附役　空閑九郎大夫
伊東嘉兵衛
「渡」邊善左衛門

御小物成所

一米四石充　附役　直塚良助　一同五石充　中川貫之允」　一同六石充
浦忠左衛門　川瀬孫之允　一米六石充
坂井次郎兵衛　増田安兵衛
空閑右兵衛
宮田新五左衛門
石田善太夫
千布六兵衛
綾部大右衛門
諸岡大之助
秀嶋大七
附役銀方請持　関判蔵
中溝東左衛門
附役　牟田口利左衛門
中村大助
八戸彦兵衛
清水新右衛門
古川利右衛門
右同差次　石丸嘉右衛門
原口太兵衛　」

弘道館
「
一同八石　助教　井内左馬之允」
一同七石充　学館御目付　深堀又太郎
「重松基右衛門」
一同七石充　「教諭　佐々木宇右衛門」
大園寿兵衛
武冨文之助
一米四石六斗六升六「合六勺充　差次　渡邊善兵衛　」
前山清一郎
大野原文武心遣　久保良作
一同五石
御境目方
一同三石充　「下村三郎右衛門
北嶋奥左衛門　」
御火術方
一同弐拾石　相談役　執行「玄蕃」
一米七石充　「御目付　牧又蔵

好生館
一同「八石」
勘定所
一米五石
一同三石充
教導方頭取　大庭雪斎
附役　亀川新左衛門
書抜役　嶋定左衛門
副嶋善九
枚町官大夫
御蔵方
「
一同弐拾石
一同拾石
一同九石
頭人　松永五左衛門
立會役　成松新兵衛
附役銀方頭取　久米次左衛門

一四石充
御石火矢方
一同拾石充
一同弐石五斗充
御絵圖方
一米三石充
一同弐石充
頭人　原次郎兵衛
百武善右衛門
附役　徳久弥太夫
関藤太夫
横尾善太夫
生嶋龍一郎
沢野文作
差次　堤新之允
石井「清兵衛」
西山幸七

多伊良三左衛門
吉岡作左衛門
「原新兵衛
成冨久兵衛」

御船方

一米三石充　今泉弥大夫
中西七三
丹羽五郎助

修理方役

一同弐石五斗充　竹下文吉郎
小森清左衛門

一同壱石八斗六「升六合六勺　差次　宇野忠右衛門」

検者方

一同五石充　丹羽與左衛門
横尾神左衛門
村岡寛蔵

「　　」

郷普請方

一同弐石五斗充　小森覚右衛門
石井喜右衛門

一同壱石六斗六升六合六勺　差次　安住半作

抱夫方

一同弐石五斗　大木次右衛門

献米方其外

一米三石充　松本文蔵
深町文八

諸番所詰

一同弐石充　轟木　原三大夫
千栗　千住久左衛門
豆津　赤司三郎左衛門
市場　下村大助
石塚　北嶋兵左衛門
早津江　野田善大夫
佐嘉江　石井九郎右衛門
今津　白濱関左衛門
柳鶴　入江善大夫

「　　」

深堀　岡本安右衛門

有田新村　秀嶋新左衛門
原明　増田宗右衛門
楠久　藤崎孫之進
伊万里　成冨新左衛門
池峠　野口愛右衛門
桃川　光増治兵衛
「椎場　香田新八
轟木上屋番　副嶋彦之允
神崎　山中四郎三　」

「　　」

中古賀薬蔵番　萩原藤左衛門
餅田右同　松田權大夫
袋右同　福井甚兵衛
三重津御船蔵番　長沼源作
今津右同　梅崎龍八

伊万里楠久右同
川瀬寛左衛門

右之通、文久元年御物成之内より可被相渡候、以上

酉九月未　　御年寄中

御蔵方　九月十八日　使勝平　受取古川利右衛門

【史料6】

（表紙）
『文久元年
年役々料書出帳』

一役料三百石　　當役　上総（武雄・鍋嶋茂昌）
一同百石　　御火術方　志摩（倉町・鍋島敬哉）
一同弐石　　御什物方書写役より一順　御什物役兼帯　徳嶋九兵衛
一同弐石　　御什物方書写役　堤久之允
一役料弐石充　　請役所書写役　北原彦四郎
一役料五石充　　山口六太夫
大石小助
成冨十郎助
江口十蔵
中嶋祐右衛門
岩松俊平
藤本千八
蒲原嘉右衛門
野口武左衛門
川原新平
前山庄左衛門
田雑源六
池田喜左衛門
竹野喜傳太
空閑小左衛門
柴田良助
田村幹之助
須古市兵衛
山口五郎助
松村嘉平次
村山綱一郎
一番ヶ瀬勘助
中嶋源一郎
学館都検　向井次郎作
小代七四郎
指南役　村上孫兵衛
犬塚儀一郎
中橋弾之允
迎文橘
宮部良太夫
下村忠太夫
塚原左平太
東嶋末次郎
宮部善之進
石田助太夫
副嶋次郎

木原儀四郎
小森二左衛門
蒲原權太夫
中野逸作
副嶋謙助
馬渡清吉郎
高木文六
大木民平
池田文八郎
一役料三石三斗三升三合三勺充
指南役差次
福嶋佐一郎
石井健一
石井龍右衛門
中隈大四郎
野田一之進
恩田義十
香田新左衛門
横田誠太郎
佐野又四郎
村嶋辰之助
年行司宗門方
馬究方附役
納冨六郎左衛門
高木新兵衛
一役料五石充
一同三石三斗三升三合三勺
一同三石充
一役料四石充
一役料五石
右同差次
牟田口久兵衛
御火術方助役
武雄左平太
川瀬又七郎
伊東兵左衛門
馬渡又兵衛
松永寿一郎
江口十郎左衛門
岡鹿之助
秀嶋轉
田中源右衛門
田口忠蔵
秀嶋傳之進
平方治三太
田原左源次
倉永藤太夫
村山又兵衛
蘭学寮々監
相良平作
右同指南役
大隈八太郎
副嶋要作
堤喜六
小森喜一郎
好生館附役
野口平六
一同三石
一同五石充
一同三石三斗三升三合三勺充
右同指南役
楢林蒼寿
寺社方町方附役
藤瀬孫太郎
渡邊惣右衛門
右同差次
田中禮太郎
野田平兵衛
盗賊改方
抜荷改方
石井清左衛門
加賀權作
一同七石充
一同五石充
究役
伊東精介
石井又左衛門
一役料三石三斗三升三合三勺充
究役差次
井原八郎左衛門
石井雄左衛門
井上作左衛門
石井平九郎
下村源六
一同五石充
三御丸御番
中嶋弥次兵衛
関儀左衛門
福地助之允
志波喜左衛門
副嶋三郎兵衛

水町夘右衛門
馬渡三右衛門
下村安左衛門
諸岡作太夫
長尾市之進
秀嶋善次郎
田原源兵衛
野田勘兵衛
大塚文七郎
長森喜右衛門
皿山代官助役
古賀源四郎
庄嶋清五左衛門
諫早代官助役
江口九郎助
伊東源左衛門
横邊田代官助役
藤崎源右衛門
福地彦太郎
大木平吾
三ヶ嶋又右衛門
空閑次郎八
市武代官助役
川浪吉之允
宮地平太夫
木下源吾
深江平兵衛

一役料三石充
一同三石充
一役料三石充
一同三石充
一役料三石充
一同三石充
一同弐石充
一役料弐石五斗
一同弐石
一同壱石五斗充

岡山瀧馬
原口重蔵
石井清八
川副代官助役
市川彦吉
米倉重兵衛
永渕宗一郎
諸岡杢兵衛
綾部新五郎
上佐嘉代官助役
石尾左源太
馬渡禮助
古賀太藏
今泉十郎
銀蔵役
牟田文之助
森大之允
米蔵役
千布文左衛門
石井嘉藏
徒罪方
野田善次
取立方
渡邊兵左衛門
諸御蔵心遣
石丸六郎
重松朝之允
枚町七郎兵衛（朱字）「左衛門」

一役料壱石五斗充
一役料壱石五斗充
一同弐石充

高木利兵衛
宮永二左衛門
安住石之助
千々岩六右衛門
馬渡千三郎
田中荘兵衛
太田辰之助
諸御蔵番
徳久半之允
堤才四郎
古瀬十之允
深堀作右衛門
石井八左衛門
吉田市郎
三谷千左衛門
小林逸藏
石井久左衛門
野中龍作
藤山治兵衛
諫早御蔵番
増田七郎右衛門
御門御式臺番
深町左兵衛
多々良貞右衛門
水町恕助
小川壮内
江頭孫太夫

福田大之助　秀嶋藤之助　宮冨忠一郎
小森久太郎　増田左馬進　石田利兵衛
高嶋治右衛門　中牟田倉之助　石田武平
秀嶋熊之允　小川剛一郎　岩村大三郎
古賀孫之進　馬渡八郎　北嶋龍右衛門
馬渡喜左衛門　御新地方助役 三浦丹右衛門　金丸清右衛門
廣木健蔵　迎栄之允　渋谷左助
中嶋芳作　古賀太右衛門　福地辰助
中溝龜次郎　両御山方助役 田中善左衛門　枚本一左衛門
百武猪之助　石井作左衛門
中村安之允　執行孫八
林恵吉郎
宮冨淺之允
深川源之助
下村虎之助
立川千兵衛
北嶋虎之助
林兵之助
検者役 堤與十
於保弥兵衛
海軍取調方助役 増田孫作
沢野虎六郎
原元一郎
真木安左衛門

一役料三石充
一同三石充
一役料三石充
一役料弐石充
一同壱石五斗充
一役料三石充

冨石忠七
大坪龍太夫
相浦惣左衛門
江副寛次
千貝新之允
高岸兵次
成冨半助
中山傳太郎
石隈兵之助
与扱 大木傳之進
小森善之允
北嶋五郎太夫
松田源右衛門
嶋内五郎右衛門
兵動忠太夫

右之通、文久元年御物成之内より可被相渡候、以上

酉十二月　御年寄中

十七日
御蔵方 請取古川利左衛門 使右兵衛